

「あしたがあるというあたりまえ」

宮田中学校 尾関 真衣さん

「あなたの夢はなんですか？」

これまでの私は、その問いに迷わず答えることができました。

「私のしょうらいのゆめはバリスタです！私がいれたコーヒーをおいしいってえがおになってくれたのがうれしかったからです！」

「私の夢は小説家です。汐見夏衛先生の作品が大好きで、自分でも書いてみたいと思うようになったからです。」

「私の将来の夢は、幼稚園の先生になることです。職業体験で実際に子供たちと触れ合ったとき、その笑顔に大きなやりがいを感じたからです。」

しかし、その中でも特に輝いて感じていたのは「看護師」という職業でした。

母が元看護師で、いつも仕事の話を楽しそうに語ってくれました。その笑顔を見るたびに「こんなふうに誇れる仕事って素敵だな」と感じていたのを覚えています。でも同時に、人の命を預かるという責任の重大さに不安も感じていました。そして、心のどこかで線を引いてしまっていたのです。

昔は夢が変わるたび、胸が高鳴り、未来を思い描くのが楽しくて仕方ありませんでした。しかし、この壁に気づいたときから、それはただの憧れにすぎなかったのだとを感じるようになりました。それから、中学3年生になった今の私は、軽々しく夢を語れなくなってしまいました。憧れではなく、「どう生きていくか」を真剣に捉えるようになったからです。現実の壁や将来への不安。幻想を抱くだけでは、生きていけないということに気付いてしまったのです。

そんな私を変えたのは、中学二年生のときの世界の子どもに関する授業でした。

「世界には、5歳の誕生日を迎えることなく命を落とす子供が年間560万人以上もいます。」

その数字に目を疑いました。言葉が出ませんでした。私が5歳だった頃は、「あした」があることは当たり前のことでした。友達と笑いあい、家族と温かいご飯を食べる。未来はずっと続いていくものだと思っていたのです。そして、私の身近には、外国にルーツを持つ友達があります。そんな彼女らに影響を受け、昔から外国の文化にとっても興味を持っていました。ファッションや食べ物、音楽など、目に見える「素敵な部分」に心を踊らせていました。しかし、戦争や貧困、教育格差など、深刻な現実に対して何も知らなかったのです。私の世界は、笑顔や楽しい出来事で満たされ、「あたりまえ」に平和が続くと思い込んでいたのです。

でも世界には、「あしたがあるというあたりまえ」が奪われる子どもたちがいます。世界の人々に向けて、戦争の恐怖や飢え・病の苦しさを訴える、小さな身体。初めて知った「世界の事実」に、まるで頭を殴られたような衝撃を受けました。その日から、私は決めました。そんな子どもたちの命を救う人になりたいと。

その後、ユニセフの活動を調べ、募金や広報などいろいろな関わり方があることを学びました。それでも私は「現場で直接命に寄り添いたい」と思ったのです。そして、それには看護師になることが必要だと気づきました。かつては「無理だ」と線を引いた夢。今では「私になるべき職業」に変わりました。もちろん、簡単な道ではありません。紛争地や医療資源の乏しい地域での実践、高度な語学力も求められます。

それでも、進んでいく覚悟を決めました。今、私は英語の学習に力を注ぎ、国際交流のボランティアにも積極的に参加しています。たとえ小さな一歩でも、それが未来へとつながっていくことを信じて。昔の私は、「いいな」という気持ちだけで夢を語っていました。でも、今は違います。世界のどこかで苦しんでいる命に、自分の手で寄り添いたい。この思いこそが、私の確かな第一歩です。

夢は、ただみるだけのものではありません。動き出したそのとき、初めて「生きた希望」になる。「あしたがあるというあたりまえ」を世界中のすべての子どもたちに届けてみせます。